

状況や、終戦近くのラジオで聞いた「日本の皆さん、さようなら」の事も、今では八代洋子になられた彼女にお電話したら、「今日樺太時代の同窓会があるから聞いてあげる」との事でとても嬉しかつた。二、三日して電話をよこして下さつた。洋子さんは同窓会だけでなく、色々調べて下さつたらしい。何しろ六十年も過ぎている。

皆の記憶からは、たしかに遠くなつてゐるのは当然の事。洋子さんは、「私達は早く軍の命令で南下して軍の船で稚内に来たから無事だつた。その後上敷香は日本軍の手で焼かれ物凄い火の海だつたそうなの」私の聞きたかつた交換手は真岡の郵便局（戦前は郵便局に電話の交換手も一緒だつた）八名くらいだつたらしくその一人からで、局長さんの敵の辱めを受ける位なら一緒に死のうとの言葉に青酸カリを飲む寸前の最後の通信だつたとの事だつた。その他に沿岸病院では看護婦さんも七、八名注射や薬を飲んで自決したとの話。これは内地の人にはあまりしられていないけれどもその事だつた。電話交換手の像は稚内近くの小高い丘の上に、真岡に向かつて「乙女の像」として建つてゐるとの事である。ソ連の攻撃で一番被害の酷かつたのは樺太庁のあつた豊原あたりで、南の方は爆撃の凄まじさ、そして略奪やあらゆる暴行、この世の地獄の様だつたとか。小樽廻りの引揚船二隻は、国籍不明（恐らくソ連と思われる）の潜水艦に沈められ、助かつた人もあつたが、多くは船と共に沈んでしまつたとの事だつた悼ましき限りである。時々ふと口に出るのは「螢の光」の中の「台湾の果も樺太も八州のうちの守りなり」の懐かしい歌詞の一節で、口いっぱい開けて歌つた子供の頃の卒業式を思い出し、今は無い両方の国土の事を考えるとたまらなく言い様のない淋しさを感じるこの頃である。

外つ国となりし樺太恋いつつも

氣丈に生きし君は今亡し（キヌイさんに捧ぐ）

駆足で春夏秋冬過ぐる日々

追いつきあぐねただ疲れ老ゆ

永久の平和と國の弥榮祈りつつ。

## 藤川小学校の戦中・戦後

### 登校はラツパで行進

朝五時、集落内の静寂を破つて勇壮な起床ラツパが鳴り響く。ここは藤川村入豆田の集落。吹いてゐるのは昭和十年入学の安達善弘氏だ。彼は小学低学年からラツパを吹いてきた。肺活量の大きさだけではない。高田の兵長が来校し児童たちを並ばせてラツパの指導中に認められたのだと言う。以後彼はラツパ専門となつてゐる。

登校する際には集落の団長を先頭にして団旗（集落）を掲げ、彼の吹くラツパにあわせて肅々と行進する。途中、年長者などがすれ違う場合には敬礼をして挨拶を交わす。学校に近づくと、校門前で回れ右をし、校門を入り、二宮尊徳像のところで回れ左、奥にある奉安殿に深々と一礼をし、気をつけ、回れ右で教室に向かう。これが戦時中どこの集落でも行われていた当たり前の登校風景だつたという。当時の校長は新鶴出身の武藤俊彦氏である。

因みに、筆者は昭和十九年に藤川国民学校に入學しているので、隣のかなたにそれらしい記憶が残つてゐるが定かではない。校長は平山千代